

多文化共生の新展開を考える 白老で第59回北海道博物館大会開催



36年ぶりとなった白老大会（7月15・16日、北海道博物館協会、白老町など主催）は、アイヌ文化復興等に関するナショナルセンターとして国がウポポイ（民族共生象徴空間）を開設した地での開催です。

大会テーマは「博物館とアイヌ文化—多文化共生の新展開」。全道の博物館・園、関連施設の職員や活動に協力する人らの計約100人の参加者が、博物館を核の一つとして各地で進められているアイヌ文化の振興やまちづくりについて討議しました。

研究大会では基調講演が行われ、アイヌ民族文化財団の村木美幸・民族共生象徴空間運営本部副本部長、佐々木史郎・国立アイヌ民族博物館館長の2人が講演しました。

村木副本部長は「将来に向けて先住民族（アイヌ民族）の尊厳を尊重し、差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会を築くことがウポポイの役割」とし、「差別をなくすためにもこういった意識、価値観を高めたい」と語りました。地域連携については「各地の取り組みも伝えることができると思っていますが、形だけではなく『思い』も伝えられたら」と締めくくりました。



佐々木館長は「国立アイヌ民族博物館は、国立博物館としては規模が一番小さい。だから単独というより『連携』『ネットワーク』で機能を発揮しなければ」と、目指す連携の柱を「地域のアイヌコミュニティとの連携」「地域の博物館、研究機関・団体との連携」「地方公共団体との連携」と据えていることを語り、「今後は各地域のアイヌ文化を取り上げたテーマ展の開催も考えています」と紹介しました。



第2日は虎杖浜アヨロや元陣屋資料館などを巡る「白老の自然と歴史を散策する」と、「ウポポイにどっぷり漬かる」の2班に分かれた見学会が催され、見聞を深めていました。



知っておこう アイヌ文化

ニンニンケツポ

イランカラブテ。夏の夜の風物詩と言えど？ 幻想的な光の点滅を繰り返すホタルもまた、その一つでしょう。ホタルはアイヌ語でニンニンケツポ（消え消えする小さいもの）やニンニンケツカムイ（消え消えする神）などと呼ばれ、アイヌ民族にとって、ホタルもまたカムイととらえていたことがわかります。アイヌ民族のカムイユカラ（神謡）によれば、ホタルのカムイ（神）がお婿さんを探して自ら発する光で海を照らしながら飛び回り、ヒラメやサメ、タラなど、さまざまな魚のカムイに出会うも、ホタルのカムイ自身が最も自分に相応しい相手として、最後にシリカプ（メカジキ）と運命的な出会いを果たし、めでたく夫婦になるというお話が伝えられています。さて、町内でも数カ所でホタルを観察することができますが、白老仙台藩陣屋跡を流れるウトカンベツ川の支流もその一つです。陣屋跡の周辺はアイヌ民族にとってもゆかりの深い場所で、特にウトカンベツ川は、アイヌ民族に伝わる物語によれば、その昔、この川を挟んで両岸から矢を射合う戦いがあったので、ウ（互いに）・トゥカン（矢を射る）・ベツ（川）という地名になったと言います。本当にかつて、矢を射合う戦いがあったのか？ そもそも、どうして戦わなければならなかったのか？ 次号で引き続きご紹介したいと思います。



仙台藩白老元陣屋資料館の横を流れるウトカンベツ川

政策推進課 アイヌ政策推進室 学芸員 森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301